

教 仏 名 聞

第56号
(発行日)
2015年5月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

仏法測量なきゆえに

仏光測量なきゆえに

難思光仏となづけたり

諸仏は往生嘆じつつ

弥陀の功徳を称せしむ

現代語意識

(アマダ仏の光明の徳は無量にして無辺であり深きこと底なきが如くであつて、佛ではない私たちの思いでは到底はかり知ることにはできない。であるから阿弥陀仏の光明を釈迦仏は〈難思光仏〉とも名づけられた。もろもろの仏たちは、このアマダ仏の光明・名号の力によつて衆生が救われて浄土に往生せしめられることをまことにすばらしいとほめながら、阿弥陀仏の広大無辺なお徳を称讃される。)

* * *

このご和讃も曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』の

「その光、仏を除きてはよく測るものなし。ゆえに仏をまた難思議と号けたてまつる。十方諸仏、往生を歎じ、その功徳を称したまへり。ゆえに稽首したてまつる。」

にもとづいて詠まれた親鸞聖人の歌です。

如来法蔵様 (アマダ如来)

の救いは、貧しい知性しかもっていない私たちにとっては、極めて不思議なお助けなのです。弥陀の本願は「我が名を称えるばかりで助ける」との誓いですが、これはまったく不思議な仰せなのです。

ここで「助ける」と如来様が仰せられるのは、私たちの一切の罪を除き、死に至る身をはかりなきいのちにあずからせて下さることです。

如来法蔵様の仰せは「助ける、マカセヨ」の誓願です。煩惱妄念だらけの私たちが、阿弥陀仏におまかせするばかりで、浄土に生まれ清浄真実の佛にして下さるといふこと、このことは不思議な中の不思議ないわれです。

真宗門徒はこういう説教を聞きなれてますから「耳なれずぬめ」になり、なんとも思わなくなつてしまいがちですが、仏になるような功徳もなく、修行もせず、煩惱をたれ

仏にして下さる。このことは、あまりにも不思議な話ですから、世間の常識や現実の人生からかけ離れた話に聞こえましよう。

「そのままなりを我が引き受けて浄土につれていく、仏にする」との本願の仰せは、本当言えば驚くべきことではありませんか。

それを何とも感じないといふのは、自分が危うい状態にあることを知らず、あるべからざる状態にいる愚かな凡夫であることを知らず、また自分が「助かりたい」とも思わないからでしょう。

『正信偈』に「極重悪人唯称仏」(極重の悪人よ、ただ仏の名を称えよ、助ける)とあります。『正信偈』のお勤めをしていて、(極重悪人唯称仏)のところに来ますと、それを自分が助かりたいと思つて読むなら、「これは本当か」と疑問が湧くか、それとも「ああありがたい」と感じるかだと思ひます。何とも思わないの

流してかえりみない愚かなこの凡夫が、このままなりでアマダ仏の仰せにしたがうばかりで浄土に至らしめ

は、自分が問題になつていないか、よそ事を思つていないからでしょう。

光明無量がアマダ仏の本質といわれ、光明のはたらきが如来法蔵様の救いとして表現されています。このアマダ仏の光について、このご和讃では「仏光測量なきゆえに難思光佛となづけたり」と讃えられていますが、この光のはたらきは、私たちにとつて(のみならず、菩薩方にとつても)、「測量することができない」すなわち思い計ることのものでできない深く広大な救いですよ、と教えられます。

測量というのは、読んで字のごとく「測量する、計量する、はからう」ことです。

これについては『仏説無量寿経』に、「如来の智慧海は、深広にして涯底なし。二乗の測るところにあらず。唯仏のみ独り明らかに了りたまへり」と

と釈迦如来様によつて説かれて

います。「如来法蔵様の本願は、凡夫はもちろんのこと、二乗といわれる菩薩や声聞いわゆる賢者・聖者方にも、弥陀の本願の深くて広い智慧の深さを

だ悟りを完成した仏様だけが
あきらかに知りたもう。」と説
かれています。

ということはおかしい、これはあ
りえない」とか、あるいは「こ
れはどうであろうか。これは
疑わしい」などと、本願に対
して、「物事を測量するように、
計量し、見定め」て、「確かな
ら受け入れよう」「不確かなら
受け入れまい」というように
計らうなら、本願の救済をい
ただくことは極めて難しいと
いわざるをえません。凡夫の
小さなモノサシを基準にして、
アミダ仏の広大な智慧からで
た本願のみ言葉（仏言）を計
つて是非するのは、（自分の知
性は確かであって、佛の言葉
は不確かだ）という思いあが
りがあるからです。

弥陀の本願は愚かな私たち
の「納得や是非の判断」で「確
かめられる筈はまったくない
こと」をここでも教えられま
す。

私たちへの救いは、私たち
凡夫の判断からできあがった
のではなくて、如来法蔵様の
さとり智慧から現れたもの
です。ですから凡夫のモノサ

シをさしおいて、「仏の仰せを
仰ぎ聞く」ことが肝要です。

さて「測量する」とか「計
測する」とかいうと、自然科
学とか科学技術のことをすぐ
思います。

自然科学による、ものごと
を計測して判断し、それによ
つて自然界の法則を見出し、
それを応用して技術を発展さ
せて、現代人は便利な生活を
謳歌しています。

ですから、飛行機に乗って
アメリカに行く場合、飛行機
を信頼して乗るのですが、そ
れは科学技術を信頼している
からです。血液検査をして健
康かどうかを計るのも、科学
（医学）の力を信じているか
らです。確かに科学技術によ
つて宇宙にまで人を送り出す
こともできるようになりました
ことから、科学の力には目を見
張り、圧倒されかねません。

けれども、科学は「ある物
質現象とある物質現象の關係
を測定して、それを因果の關
係で結んで数式に表す」とい
う方法で、物質的な現象間の
法則を明らかにし、その法則
を利用して技術を開発して応
用する。それが科学技術の成
果となつて、現代人の生活は
非常に便利になりました。

しかし自然科学による（も
のの見方）であきらかになる
ことは、あらゆる現象の中で
の一部の（物質現象と物質現
象間の關係）であつて、（物質
現象そのもの）ではありません
ん。（物質現象そのもの）は不
思議とししか言い様はありません。

目の前のことでも不思議な
ことはいっぱいありますよ。
一輪の花が咲くことも、アリ
が動いていることも不思議で
あり神秘に満ちています。赤
ちゃんが生まれることも神秘
そのものです。音楽を聴いて
「ああ美しい」と感じる心も
不思議ですし、目で物を見る
ことも不思議です。「なぜそう
なのか」分かりません。それ
どころかそう言っている「私
つていったい何か」というこ
とになると、私の存在そのも
のが不思議の固まりです。世
界は不思議に満ちています。

こうした多様な現象の不思
議をまとめて、仏教では「五
種の不可思議」と説いていま
す。これはもちろん古代イン
ドでの表し方ですが、五種の
不思議とは、

一。衆生多少不可思議。生き
とし生けるものの数が無量で
尽きないという不思議。生き

物の種類も数限りないほどで
すが、それらが次々と生まれ
出て尽きないのは不思議です。
二。業力不可思議。各人の善
悪の行為によつて受ける結果
が千差万別である不思議。い
わゆる行いによつてその報い
がさまざまに表れてくる不思
議。

三。龍力不可思議。龍神が風
雨を起こす不思議のことだそ
うで、いわゆる今日で言う天
候などの（自然現象）の不思
議。
四。禅定力不可思議。坐禅の
修行を熱心に重ねていくと神
通力（超能力）が現れてくる
場合がある、そういう不思議
です。人の過去のことを知っ
たり（宿命通）、人が今何を思
っているかを知ったりする（他
心通）など、一般の人以上の
能力が修行を重ねることによ
つて起こり得るそうです。そ
のような不思議をいいます。
五。仏法力不可思議。仏法の
力によつて衆生にさとりを開
かせる不思議。

こういうのを（五種不可思
議）と言います。一応、仏教
では五種の不可思議といいま
すが、五種に限らないことは
いうまでもありません。

この中で、仏法力不思議に
ついて、親鸞聖人は『和讃』

に

いつつの不思議をとくなかに
仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということは

弥陀の弘誓になつてたり

と詠われ、仏法力不思議とい

うのは何と言つても阿弥陀仏

の本願の不思議であり、「凡夫

が凡夫のままに仏にならして

下さる不思議」、これほど不可

思議なものはないと讃嘆され

ています。

今「仏光測量なきゆえに」

といわれる阿弥陀仏の光のは

たらきは、阿弥陀仏の不可思

議の誓願のはたらきとして、

私たちのほかり知ることので

きない不可思議な「丸だすけ」

の救いですから、阿弥陀仏を

（難思光佛）と名づけられて

いるのであると仰せ下さるの

であります。

私たちは、不思議に満ちて

いる世界の中にあつて、もつ

とも不可思議な弥陀の本願の

思し召しを聞かせていただく

のであります。

ではどのようにこの誓願不

思議を聞かせていただくのか、

それについて宗祖聖人は『ご

消息』に、

「ただ誓願を不思議と信じ、

また名号を不思議と一念信じ
となえつゝうは、なんじょうわ

がはからいをいたすべき。ききわけ、しじわくをなんど、わずらわしくはおせ候じやらん。これみなびびごとにて候じなり。

ただ、不思議と信じしつゝえは、とかく御はからいめべからず候じ。あつじよのつじには、わたくしのはからいはあるまじく候じなり。」

と仰せ下さっています。不思議の本願はただ「不思議なことよ」「ああ有難い」と、すなおに受け入れるほかはないのであります。私たちは、自分が浄土に往生できるかどうか、それを確かめる力も智慧もなにもありません。弥陀の本願の前では一文不知の愚かな者でしかありません。

愚かな私と知るなら、私たちは、アマダ仏の本願を聞いて、自分の知性ではわからぬままにアマダ仏の不可思議な大悲に引き受けていただくのであります。あまりにも有難い仰せに驚いて、理屈離れて、ただ単純にお任せせずにはおられないのです。

それは裏からいえば、どのような者でも自分の知性的な判断や計らいを当てにせずたのみにもせず、このままなりで助かるのであります。

「弥陀の本願はまことである」ということは私たちの知

性では分からぬまま、そのままでいわば「分かる」のです。分からぬままで助かることが分かるのです。弥陀の本願が真実であることは、分からぬままに、おまかせすれば「弥陀の本願はまことである」と知らされるのです。

弥陀の本願がまことであることは、自分の知性の力に依ってではなく、弥陀の本願そのもののお徳によって知らされるのです。

弥陀をたのめば、アマダ仏の本願のお心は私たちのまっくらな闇の心の底に届いて下さり、心の底が明るくなるのです。まことに弥陀の本願は不思議な心の光なのです。閉じられた私たちの暗い心は大悲の心の光によって破られるのです。

なお余談になりますが、私たちの知性では「測量することとはできない」という点に関して、自然現象だけではなく、人間の世界や歴史についての測定や判断も、私たちの知性はまことに不確かです。

ベルリンの壁が崩壊して東西の冷戦が終結し、これでやっと平和な世界になりそうだと思っていたら、イラク戦争やアフガニスタンの内戦が続

き、イスラム国のようなところでもない集団が現れてきました。こうなるとは思ってもありませんでした。これから世界は一体どうなるのかだれも正確に予測することはできないように思います。将来中東はどうなるのか。中国はどうなるのか。日本はどうなるのか。

それこそ目の先の予測しかできないし、その予測もしばしばはずれます。評論家や学者は現在の状態から少し先の未来を判断し予測しているに過ぎないと思います。

こうして未来の予測ができないとか、何が起るかも分からないとか、不確かな世界だということ、私たちは不安になりましょう。

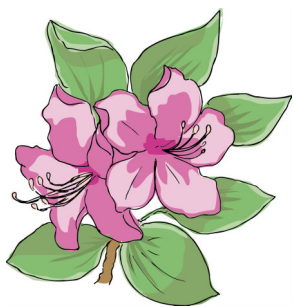
しかし、この世界も人生も、へいのちはかりなく、光はかりなきアマダ仏に包まれ、アマダ仏のはたらきの上に私たち一人一人はつねに置かれているということ。この有難さを南無阿弥陀仏において聞かしまれ知らしめられるのです。世界の本质は明るく光に満ちていることを聞かしまられるのです。

阿弥陀仏は私たちと共にまします。南無阿弥陀仏と喚びかけて下さっています。南無

阿弥陀仏は「汝を抱いている、汝を必ず浄土につれていく、心配しなくていい」と仰せ下さり、浄土へと往生させて下さる力であります。この一切衆生を往生させようとはたきづめにはたらい下さるアマダ仏の願力、広大な南無阿弥陀仏のお徳を、もろもろの諸仏は称讃してほめたたえて下さっている、と聖人は詠われるのです。

ですから、この世も人生も実際どうなるのか、知ることも計ることもできないですが、どつちへどうころんでも私たちはアマダ仏の中におさめ取られていることを知る信心の智慧によって、安心をさせていただきますのであります。

(了)



《永代経法要に思う》

真宗門徒の生活は、まずお念佛（ナムアマダブツと口に称えること）を日々称えることです。そうすると自ずから本尊（阿弥陀仏。南無阿弥陀仏）に手を合わせるようになります。手を合わせるためには、お内仏（お仏壇）や念珠が必要になります。お内仏にお参りすると、手を合わせてお念佛を申すだけではなく、お念仏の意味が書かれている経本（勤行本）を誦読するようになり、勤行がなされてきます。勤行は僧侶だけのものではなく、真宗門徒一般の行いです。お仏壇にお参りすると、亡き先祖の法名を安置して、ご先祖とのであいながされて、亡きお方はアマダ仏にであわせていただく御縁になつて下さるお方として仏の如くお敬いするようになります。これが家庭での真宗門徒の日々の生活です。

そして時々、お寺に参って、称えている南無阿弥陀仏のいわれ（意味）を聞かせていただきます。真宗のお寺は南無阿弥陀仏のいわれ（真宗の教え）を聞くための場所です。場所がなければ、聞くことがなかなかできません。教えを聞く場所としてのお寺の永続を願って志をするのを永代経志といいます。そして毎年ある一定の日に本堂で、亡きお方の法名をお掛けて永代経法要がなされ、仏法のお説教が行われます。

木村無相さんの法信

32

(昭和五十八年十一月二日のお便り。ご往生される二ヶ月前です)

昭和五十八年十一月二日(水) 未明三時半

和上苑の二階の四人ベヤにて。つづいての「腰痛」と「カゼ気」に仰臥しつつ。半盲 無相

紀さんー

十月二十七日出のハガキ、①②と二枚、三十一日の午後三時ごろ受取りました。

○

九月十五日以後、三・四人の人に、五時間、六時間と一人一人法談相手したのが、大ムリになって、つかれこみ、カゼヒキ状態になって、それ以来、四十五日の今日までに、三回カゼをヒキ、三回とも熱が出て、ここ四・五日、やっと熱はとれたが、まだつかれはのこっていて、ねむってばかり。「腰痛」、一寸よいかと思うとヒトが来て、三時間、五時間と起きて語ると、又、モトのモクアミ、くりかえしています。「腰痛」と「カゼ気」で、ねて、上むいて、こうして手紙書くと、首がコリ、肩がコッテ来て、このごろ手紙書くのがとても書きづらくなりました。「目」ますます悪く。

今朝も三時半に目がさめて、これ書きだしたが、二・三行書いたら、つかれで書きなくなり、ウトウトねむって(二時間)今、五時半。

○
お念佛にはげまされはげまされてやると、又、ペンをとった。お手紙に。

私の心は佛の本願を疑う心、佛に反く心ばかりの如くであります。

佛に逆らい、佛から逃げようとし、佛の心に疑いの刃をつきつけている反逆児であります。

○
謗法、無信、疑惑の心であります。

とあるが、そうしたワレワレ凡愚の自性、本性は、十劫の昔にすでに、如来法蔵さまに、スミからスミまで、お見ぬきの上で、この者の生死出離御引き受けのために、五兆の御苦労のアゲクに、念佛往生の本願を建て、念佛を成就されて今、現に、すでにそのようなワレワレに本願念佛として、アラワレテイテ下されているゆえ、ワレワレは、その自性、本性のますますかわらぬままの根性そのまま、如来御催おしのまんにただ念佛申す、ただ念佛をいただいでゆくホカはないのです。

○
この悪性、疑惑の根性のまんま、ソックリと、本願念佛丸に乗せて生死出離せしめたもうとのことゆえ、ただただよき人の仰せ、如来の「ただ念佛せよ」の勅命のまんまに、心はどうであつても、心は心に、まかせて

ただ口に

念佛申すばかりです。

どこまでいっても、これよりホカない。本願を信じて、疑いなく念佛申そうなど

ということ「わが身のホド」を知らぬもの考えること。

○
オタガイは、そんな妙好人や信心の行者ではない。

悪衆生、邪見(疑惑)、無信の者ゆえ。

如来、お与えの、

如来、御催おしのまま、

○
お念佛いただいで日々の名利、反逆の生活をするのみ。

われらにそれゆえ、

如来、

「オーム念佛」

「発音念佛」を

○
あたえたもうて、われらの「心」をどうせよ、こうせよとはおっしゃらぬのである。

○
ソングクウがどれほど逃げようとも、お

○
釈迦様の掌からは逃げだせぬ如く、

ワレワレがどれだけ反逆しても、疑つても、その者目当ての本願念佛ゆえ、本願念

佛からは、逃げ出せぬ。

結局は、

○
仏智疑惑のまんま

オーム念佛

発音念佛

にかえされる。

それは

○
撰取不捨のゆえにである。

○
どうしようもない、これは逃げることは

出来ない。

○
ワレワレが、大地上からはなれることが

出来ないように。

○
お念佛は、

○
智慧の念佛であり、その智慧は、また如来廻向の信心の智慧(仏智)であるゆえ、

ワレワレのこの濁悪佛智疑惑の心の底か

ら、心の背後から、凡心の奥から、この凡心を

○
大悲ものうきことなく

○
常にてらしたもうて、

ワレワレの根性、自性、本性は、永劫にかわらぬことを知らせたもうのである。

○
「これは」如来仏智の

○
「機の深信」という。

○
この「機の深信」によって、

○
「オーム念佛、発音念佛のホカなし」

○
と、お念佛にかえらしめるオハタラクを「法の深信」という。

○
如来廻向のこの機法二種の深信によつて、ワレワレは「わが機」を知らしめられ、

○
「念佛」を知らしめられ、称えしめられ、

○
念佛にかえらしめられるので、

○
「わが心の佛智疑惑、反逆の心、ますます

○
止まざることを知らしめたもう」も、御廻

○
向の「仏智」のオカゲなのである。

○
わが反省や内観の力ではない。

○
他力廻向の信心のフシギである。佛智疑

○
惑、反逆のまんま、すでに佛智の信心をい

○
ただかしめられているのである。

○
その証拠が「今、称えられる念佛」であ

○
る。

○
つかれて、もう書けないので、今朝はこ

○
れだけにて。

○
真由実さんによろしく。

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

○
ナムアマミダブツ

合掌

5 8 1 1 2 水 朝六時

(追記)

○
くわしくは、念佛称え称え、念佛そのものに聞くべし。(了)

